

## 防災キャラバンin糸魚川 ～柵口雪崩災害から20年を経て～

### 本防災キャラバン開催の背景

災害復興科学センター主催の第4回防災キャラバンが、2006年9月21日（木）13:30～15:30に新潟県糸魚川地域振興局・車庫棟大会議室において開催された。

現在は糸魚川市に含まれている旧能生町の柵口地区は、1986年1月26日深夜に権現岳から発生した大規模表層雪崩（いわぼ）に襲われ、13名もの尊い命が失われ、9名の負傷者を出した場所である（写真－1）。2006年はこの柵口雪崩災害から数えて20年目の節目の年に当たり、しかも2005－06年冬期はくしくも1985－86年冬期（61豪雪）以来の20年ぶりの豪雪（平成18年豪雪）となった。そこで、今回の防災キャラバンは「防災キャラバン in 糸魚川～柵口雪崩災害から20年を経て～」と銘打ち、現在の我々が柵口雪崩災害と20年ぶりに体験した平成18年豪雪から学ぶべき教訓は何かを、糸魚川地域の行政関係者とともに再考する場とした。



写真－1 権現岳とその麓に位置する柵口集落

### 柵口雪崩災害に関する聞き取り調査

9月21日午後の講演会に先立ち、9月20日午後と21日午前にも柵口雪崩災害に関する聞き取り調査と被災地の視察を行った。9月20日午後は、糸魚川市役所において糸魚川市建設産業部の渡辺和夫部長（柵口雪崩災害当時、能生町役場職員としてハード面での復旧を担当）から、発災当時の能生町の様子、被災の様子、復旧の過程、現在の能生町の様子、平成18年豪雪による災害状況などについて話を伺った後、柵口地区を訪れ、被災地の防災対策や集落の現状を調査した。翌21日午前は、柵口地区の民宿「対岳荘」に、被災者の方々や消防団関係者7名にご参集いただき、発災当時どこにいたか、発災後どのような行動（避難や救助）をとったか、当時の様子で印象に残っていることは何か、その後の柵口の様子などについてインタビュー形式で聞き取り調査を行った（写真－2）。



写真－2 柵口集落における聞き取り調査

これらの調査によって、20年前の柵口雪崩災害の実態、その後の復旧・復興過程、現在の柵口地区が抱えている課題について理解を深めることができた。

### 講演会

9月21日午後に開催された講演会の次第は次のとおりである。

#### 「防災キャラバン in 糸魚川～柵口雪崩災害から20年を経て～」

- |                                    |                                      |                       |
|------------------------------------|--------------------------------------|-----------------------|
|                                    | 司会進行                                 | ト部 厚志（新潟大学災害復興科学センター） |
| ○開会挨拶                              |                                      | 勝本 俊一（新潟県糸魚川地域振興局長）   |
| ○「20年前の柵口雪崩災害の実態と教訓」               | 小林 俊一（新潟大学名誉教授）                      |                       |
| ○「平成18年豪雪の実態と教訓」                   |                                      |                       |
|                                    | 「降雪・積雪特性」                            | 河島 克久（新潟大学災害復興科学センター） |
|                                    | 「雪崩災害」                               | 和泉 薫（新潟大学災害復興科学センター）  |
|                                    | 「人的被害」                               | 田村 圭子（新潟大学災害復興科学センター） |
| ○「次のリスクにいかにならざるか～柵口雪崩に学ぶ被災者の対応行動～」 |                                      |                       |
|                                    | 林 春男（京都大学防災研究所教授/新潟大学災害復興科学センター客員教授） |                       |
| ○質疑応答                              |                                      |                       |
| ○閉会挨拶                              | 和泉 薫（新潟大学災害復興科学センター）                 |                       |

講演者の中的小林俊一名誉教授（元新潟大学積雪地域災害研究センター教授）は、柵口雪崩災害直後に組織された文部省科学研究費・自然災害科学特別研究（突発災害）「新潟県能生町表層雪崩災害に関する総合的研究」の研究代表者を務めており、発災翌日に被災地入りし、災害調査を実行・指揮した経験を有している。小林名誉教授からは、発生した雪崩の特徴と被害の実態が詳しく紹介されるとともに、この災害調査によって表層雪崩の知見不足、雪崩調査の連携と組織化、雪崩知識の情報化、雪崩に対する避難行動の重要性、雪崩予測の体系化、雪崩予防対策の徹底などの教訓が得られ、その後の調査研究、技術開発、行政対応の進展をもたらしたことが述べられた（写真－3）。

続いて、平成18年豪雪に関して、当センターの河島克久、和泉薫、田村圭子の3人から、豪雪の気象学的・雪水学的特徴、北海道から中国地方までの広範囲において161件も発生した雪崩災害の実態、人的被害と社会構造の関連性についてそれぞれの調査結果を報告し、豪雪時における山間部の積雪特性把握の重要性、自然環境の変貌が雪崩災害に及ぼす影響、地域住民の知恵とその

伝承の重要性、中山間地域における高齢者支援のあり方などが教訓や課題として示された。

当センター客員教授でもある林春男教授は、柵口雪崩災害の翌年に立ち上がった文部省科学研究費調査チーム「災害情報と避難行動に関する研究（研究代表者:東京大学教授・鈴木裕久）」の雪害班のメンバーとして柵口雪崩災害における避難行動や救助活動について調査分析した結果を示すとともに、それらを例として災害リスクや危機管理の考え方を分かりやすく説明された。また、20年前の経験と今回行った柵口地区の現地調査や聞き取り調査を踏まえて、今後の中山間地問題を考える上で柵口のような集落こそが典型的なモデルになると指摘された。

#### おわりに

今回の講演会には、新潟県糸魚川地域振興局、糸魚川市役所、糸魚川市消防本部の職員の方々を中心に約60名の参加があり、活発な質疑応答がなされた。また、能生ケーブルテレビによる講演会全体の撮影が行われ、後日、これが柵口地区を含む旧能生町で放映されるとのことであった。

柵口雪崩災害から早20年経過し、地域住民のみならず振興局や市役所の職員の世代交代も進みつつある中での防災キャラバンは、記憶の風化を防止し、雪崩に対する防災意識を再生させる上で意義が大きかった。また、当センターとしては、現地調査や聞き取り調査をとおして、雪国の中山間地集落を維持していく上での大きな課題を学ぶ機会にもなった。

最後に、今回の防災キャラバンの実施にあたり、深いご理解と多大なご協力をいただいた糸魚川地域振興局、糸魚川市役所、糸魚川市消防本部、柵口集落の皆様に対し心からお礼申し上げます。なお、本防災キャラバンには、当センターから福留邦洋助教授と鈴木幸治技術専門職員も参加し、現地調査と講演会の運営に当たったことを付記する。

（文責：生活安全部門・生活安全ネットワーク分野・河島 克久）



写真－3 講演会の状況